

照葉樹林のキノコ食： 雲南の野生菌火鍋にたどりつくまで



京都大学霊長類研究所長
京都大学ヒマラヤ研究ユニット長
湯本貴和

1982~1983 中央アルプス木曾駒ヶ岳



1984~1987
屋久島



コンゴ民主共和国（ザイール）のヒガシゴリラ



コンゴ共和国のマルミミゾウ



タイ国のオオサイチョウ



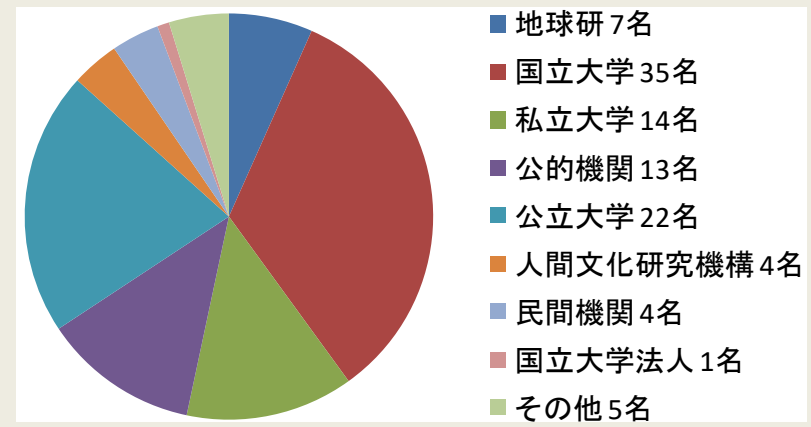
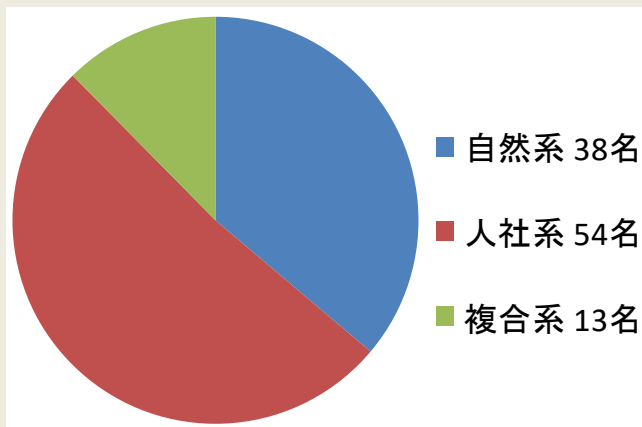


マレーシア・サラワク（ボルネオ島）の林冠研究



地球研・列島プロの取り組み

- 列島プロ:「日本列島における人間-自然の相互関係の歴史的・文化的検討」
- A new cultural and historical exploration into human-nature relationships in the Japanese archipelago
- プロジェクトリーダー: 湯本貴和(2006～2011年)
- <http://www.chikyu.ac.jp/retto/index.htm>
- 約130人におよぶメンバー











日本列島の三万五千年

人と自然の環境史

全六巻 二〇一二年一月刊行開始

文一総合出版

先史時代より一貫して人口稠密でありつづけたにもかかわらず、日本列島は地球規模でみても生物多様性の高い地域である。過去、長きにわたり高い生物多様性が維持されてきた要因には、地誌的・気象的条件に加え、地域の生態系を持続可能な形で利用するしくみ、人間社会のいわば「生物文化」の存在があげられる。この「生物文化」はいかに形成され、いかに受け継がれてきたのか。日本列島の生物多様性が崩壊の危機に直面している現在、それを知り、過去の失敗と成功に学ぶことは大きな意味を持つ。人間の歴史と生態学の知を結集し、持続可能な未来を模索する学際研究の成果を、初めてまとめる。

■編者の言葉

本シリーズは、「日本列島における人間―自然相互関係の歴史的・文化的検討」というテーマのもと、4年間にわたって継続してきた研究成果をまとめたものである。

この研究では、日本列島で人間の存在が確認されている最終氷期以降において、人間活動の影響で自然はいかに変遷してきたか、その過程で生物相の変化はどうであったのか、また、自然や個々の生物に関する自然の認識・知識・技術はいかなるものであったのかを、歴史的過程として復元し、今後の人間―自然相互関係がいかにあるべきかを考える礎を提示するとともに、近い将来での生物の大量絶滅をどのように予防するかについて、具体的な方策を示すことを目的としたものである。

本シリーズでは日本列島を主な対象としているが、その根本にあるのは世界のどこでも共通する問題意識であり、そのなかで日本列島の位置づけを明示することと、そこから抽出した原理の普遍性と特殊性を考へたい。その結果、「日本列島の恵まれた自然環境」という側面が強調され、これまで日本独自であるとされるものが多かった「自然と共生する思想」は、自然の恩恵を受けて持続してきた社会ではむしろ当たり前であったのではないだろうか。

これを踏まえ第1巻では、全体のテーマである「なぜ日本列島は生物多様性のホットスポットなのか」という根本的な問いの提示と、全巻に通底する「生物文化多様性」・「賢明な利用」・「伝統的生態知識」・「コモンス」・「ガバナンス」などの基本概念の整理を行った。

巻担当 編者

第1巻 環境史とは何か（第1回配本 1月刊）

松田裕之（横浜国立大学大学院環境情報研究院自然環境と情報部門 教授・数理生物学）

矢原徹一（九州大学大学院理学研究院 教授・進化生態学）

第2巻 野と原の環境史（第5回配本 3月刊）

佐藤宏之（東京大学大学院人文社会系研究科 教授・考古学）

飯沼賢司（別府大学文学部 教授・環境歴史学）

第3巻 里と林の環境史（第2回配本 2月刊）

大住克博（独立行政法人森林総合研究所関西支所 主任研究員・造林学）

湯本貴和（シリーズ編者）

第4巻 島と海の環境史（第3回配本 2月刊）

田島佳也（神奈川大学経済学部 教授・日本経済史・漁業史）

安溪遊地（山口県立大学国際文化学部 教授・文化人類学）

第5巻 森と山の環境史（第4回配本 2月刊）

池谷和信（国立民族学博物館 教授・環境人類学）

白水智（中央学院大学法学部 准教授・中世史・山村史・海村史）

第6巻 環境史をとらえる技術（第6回配本 3月刊）

高原光（京都府立大学生命環境研究科 教授・古生態学）

村上哲明（首都大学東京都市教養学部教授植物系統学）



シリーズ編者

湯本貴和

（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 教授）

シリーズ 日本列島の三万五千年——人と自然の環境史

揃定価 25,200 円（本体 24,000 + 税）

全 6 巻の購入を申し込みます

各巻定価 4,200 円（本体 4,000 + 税）

セット

第一巻	2011 年 1 月刊行	ISBN 978-4-8299-1234-5	部	第四巻	2011 年 2 月刊行	ISBN 978-4-8299-1234-5	部
第二巻	2011 年 3 月刊行	ISBN 978-4-8299-1234-5	部	第五巻	2011 年 2 月刊行	ISBN 978-4-8299-1234-5	部
第三巻	2011 年 2 月刊行	ISBN 978-4-8299-1234-5	部	第六巻	2011 年 3 月刊行	ISBN 978-4-8299-1234-5	部

ご住所（〒 ）	取扱店
ご連絡先（お電話）	
お名前	

表示の定価は 5%の税込みです。

購入申込書

コンゴ民主共和国のボノボ



ガボンのマルミミゾウ



マレーシア（ボルネオ・サバ州）のオランウータン





1956年マナスル(8156m)初登頂



1958年チョゴリザ(7654m)初登頂

京大関係者による偉業

2016年マナスル初登頂60周年
国民の祝日「**山の日**」発足

- * 1989年 京都大学ヒマラヤ研究会発足
「ヒマラヤ学誌」発刊 現在17号に至る
- * 2006～2012年 地球研・高所プロジェクト
- * 2010年～ 京大ブータン友好プログラム
15隊のべ200余名の教職員学生が渡航
- * 2013年 京大とブータン王立大学の覚書締結



「**ブータン**といえば京大、
京大といえば**ブータン**」
しかし、さらにアカデミックとしての
基盤を確立すべき段階

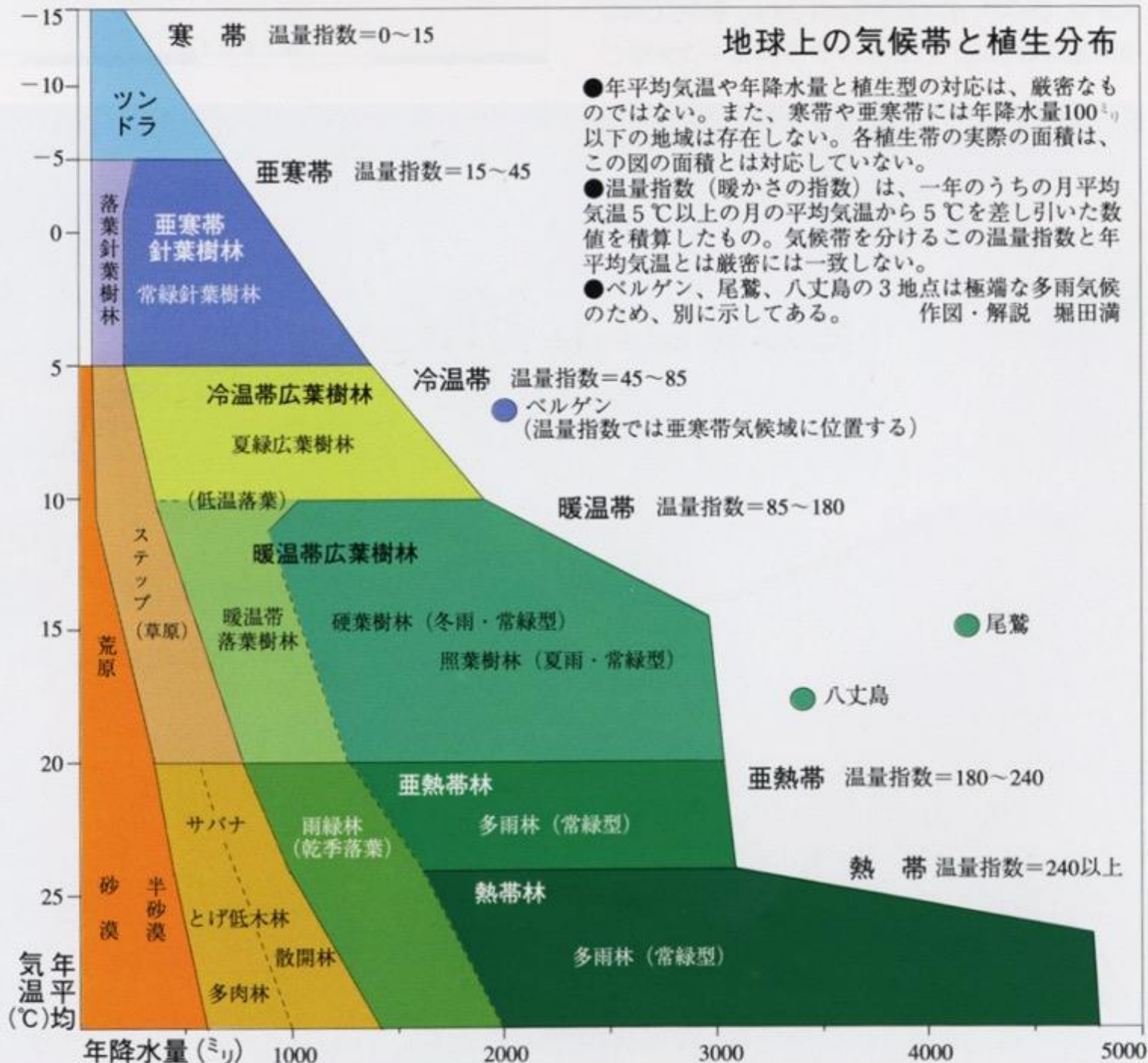
ヒマラヤ研究ユニット

- 霊長類研究所
- 野生動物研究センター
- 東南アジア研究所
- こころの未来研究センター
- 経済研究所
- 防災研究所
- ウイルス研究所
- 地球環境学堂
- アジア・アフリカ地域研究研究科
- 理学研究科
- 農学研究科
- 工学研究科
- 医学研究科
- 教育学研究科

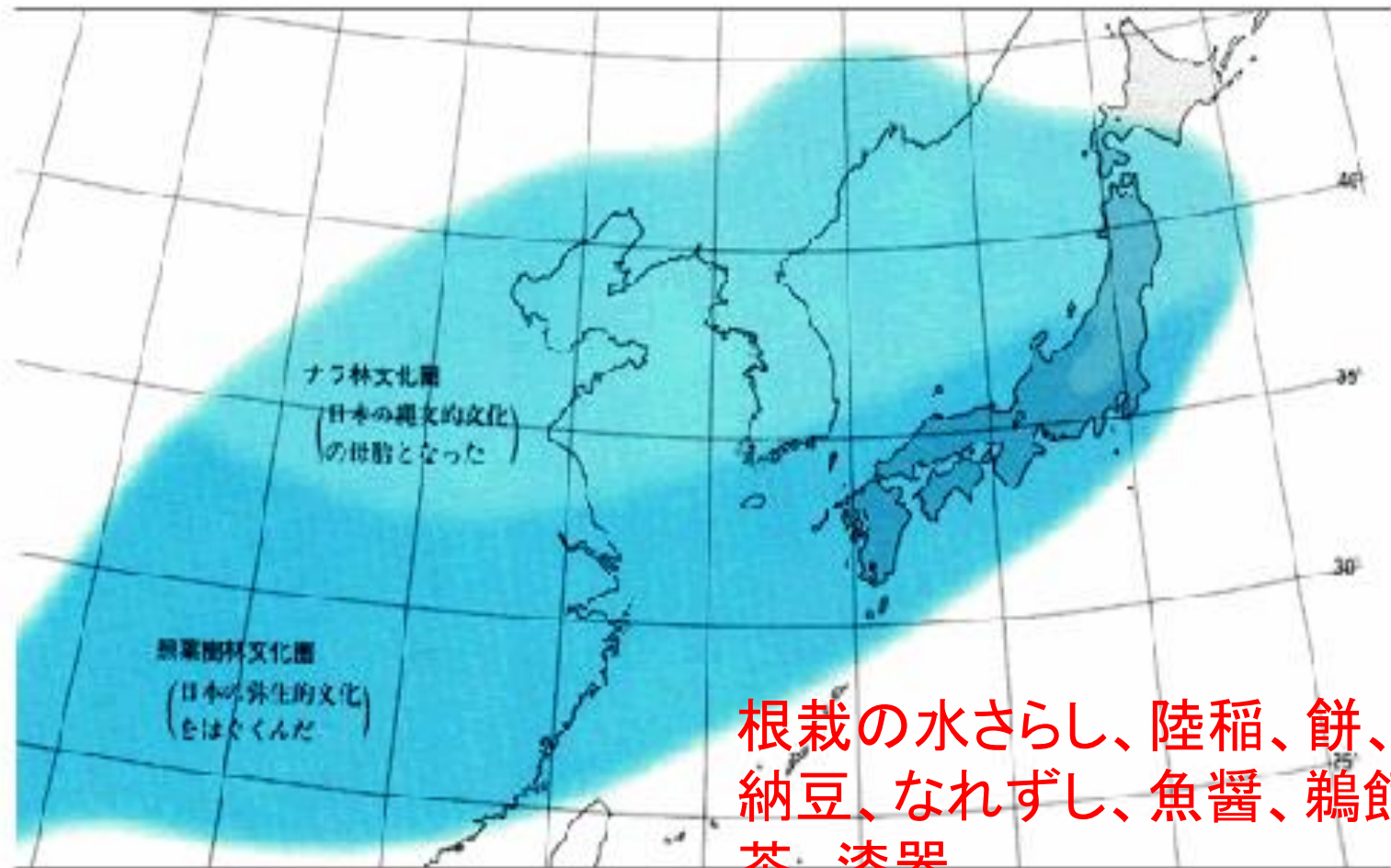
1. ブータン国を対象とした研究教育
2. 雲南・チベット・カシミール・カラコルムを含む
グレートヒマラヤに拡大 **地域研究の大きな空白地域**
3. 「ヒマラヤ学誌」をフィールド研究の求心力に
4. 京大の学術探検のデジタルアーカイブ化

第3の極地「ヒマラヤ」研究 大型研究プロジェクトの受け皿
異分野融合(生態系、防災、文化、教育、医療)
GNH国民総幸福
地球温暖化への適応

地球上の気候帯と植生分布



「照葉樹林文化—日本文化の深層」 上山春平（1969）



中国·雲南省：

高黎贡山 Mt. Gaoligong (Alt. 2500m)



Cyclobalanopsis myrsinifolia



Cyclobalanopsis glaucoides



Lithocarpus echinophorus



麻（雲南）



日本における各樹林帯の分布

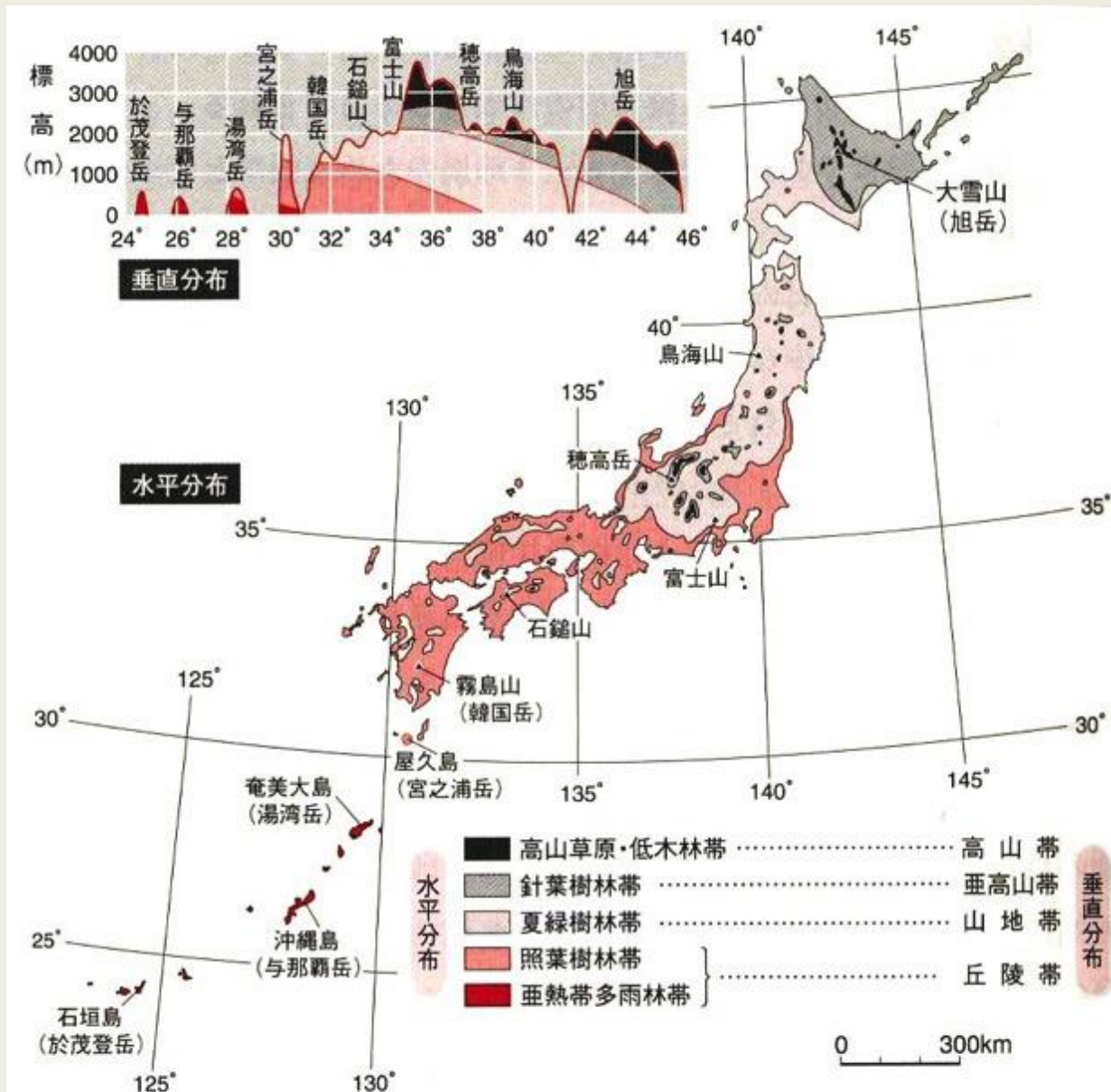


図18 日本における植物の水平分布と垂直分布

八甲田山(青森) 寒温帯針葉樹林



白神山地(青森) 冷温帯落葉広葉樹林



綾の森(宮崎) 暖温帯常緑広葉樹林



照葉樹林帯文化の特徴

焼畑など栽培植物の文化
イネを含む

野生動植物だけの環境収容力は低い

現在では人間の土地改変が著しい

縄文・弥生時代の地域別人口の変遷

カッコ内は、北海道・沖縄をのぞく日本列島の推定総人口

『人口から読む日本の歴史』（鬼頭宏著・講談社）などから作成

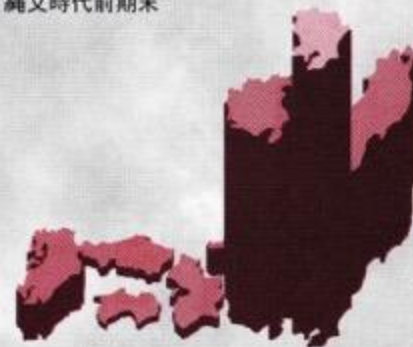
8100年前(約2万人)

縄文時代早期



5200年前(約11万人)

縄文時代前期末



4300年前(約26万人)

縄文時代中期末



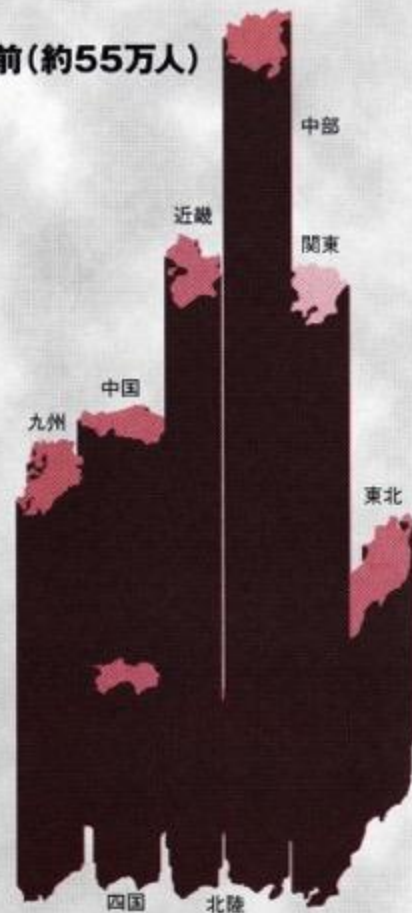
3300年前(約16万人)

縄文時代後期末



1800年前(約55万人)

弥生時代末



照葉樹林帯の山菜・キノコ利用は低調

常緑樹は食害に対する防衛がある

根栽も有毒なものが多い

→簡単には山菜にならない

→水さらしや発酵などの加工が必須

キノコは種多様性が高く、お互い似ている

→食用／有毒の区別がつきにくい

→しかも、毒キノコはときに致死の

ロシアン・ルーレット 「毒キノコ回避説」

白神山地：目屋マタギの狩猟採集の場



工藤光治さん（1942年 旧砂子瀬字村元生まれ）

父・作太郎氏は目屋マタギ・工藤系のシカリ（頭領）

15才からマタギ、伐採、炭焼きの見習修行





あいこ ミヤマイラクサ
「1本だけのは採らないで、数本が株になっているところから」



サワモダシ、ブナハリタケ、ムキタケ、ナメコ



ナメコ



エノキタケ

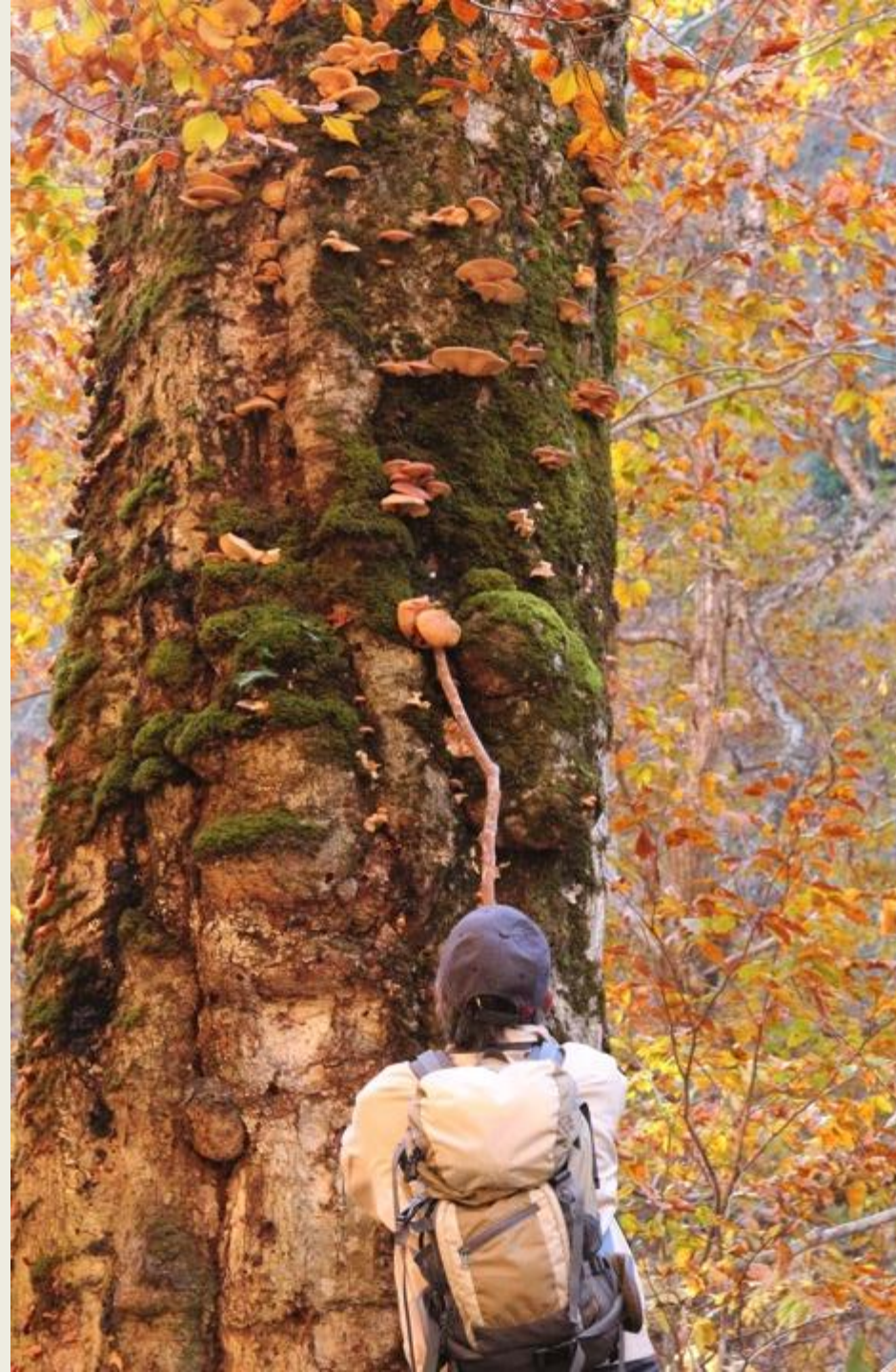
ハナイグチ



ナラタケ





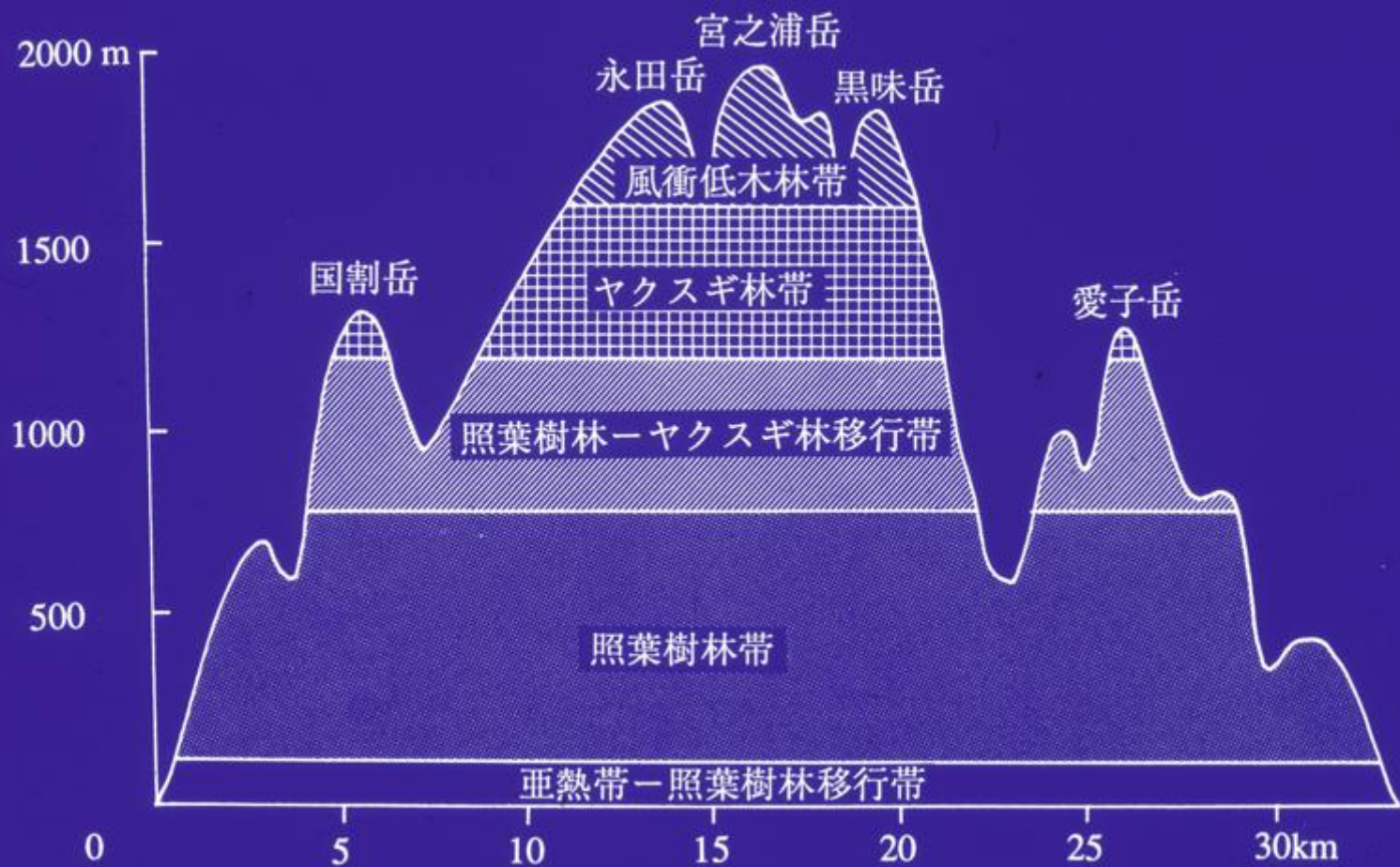




屋久島

- 九州最高峰・宮之浦岳
(1,935m)など1,800m以上の
山が7座
＝奥岳(おくだけ)
- 約1,500種の野生植物
(日本全体の5分の1)
47種が固有種





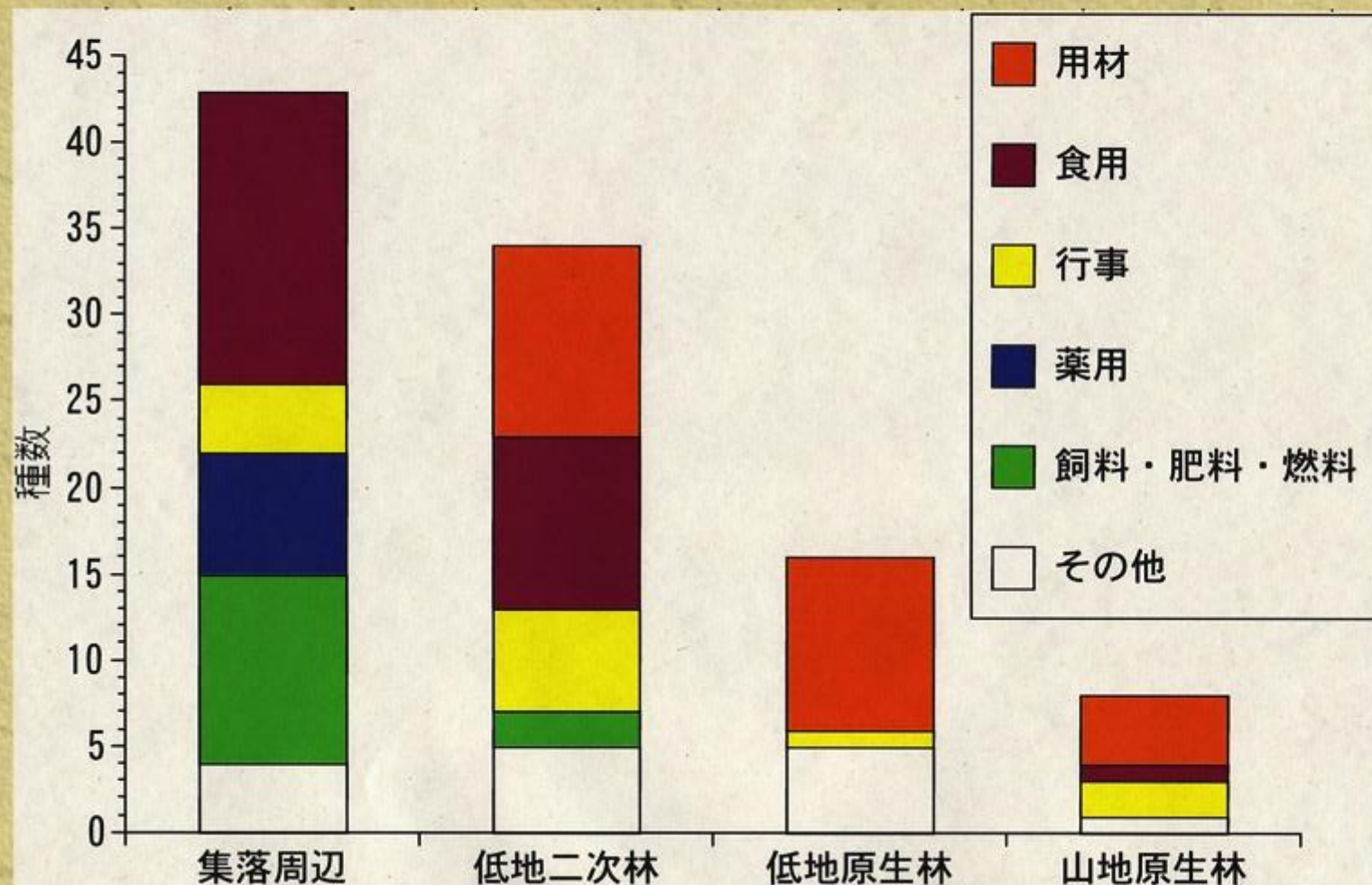




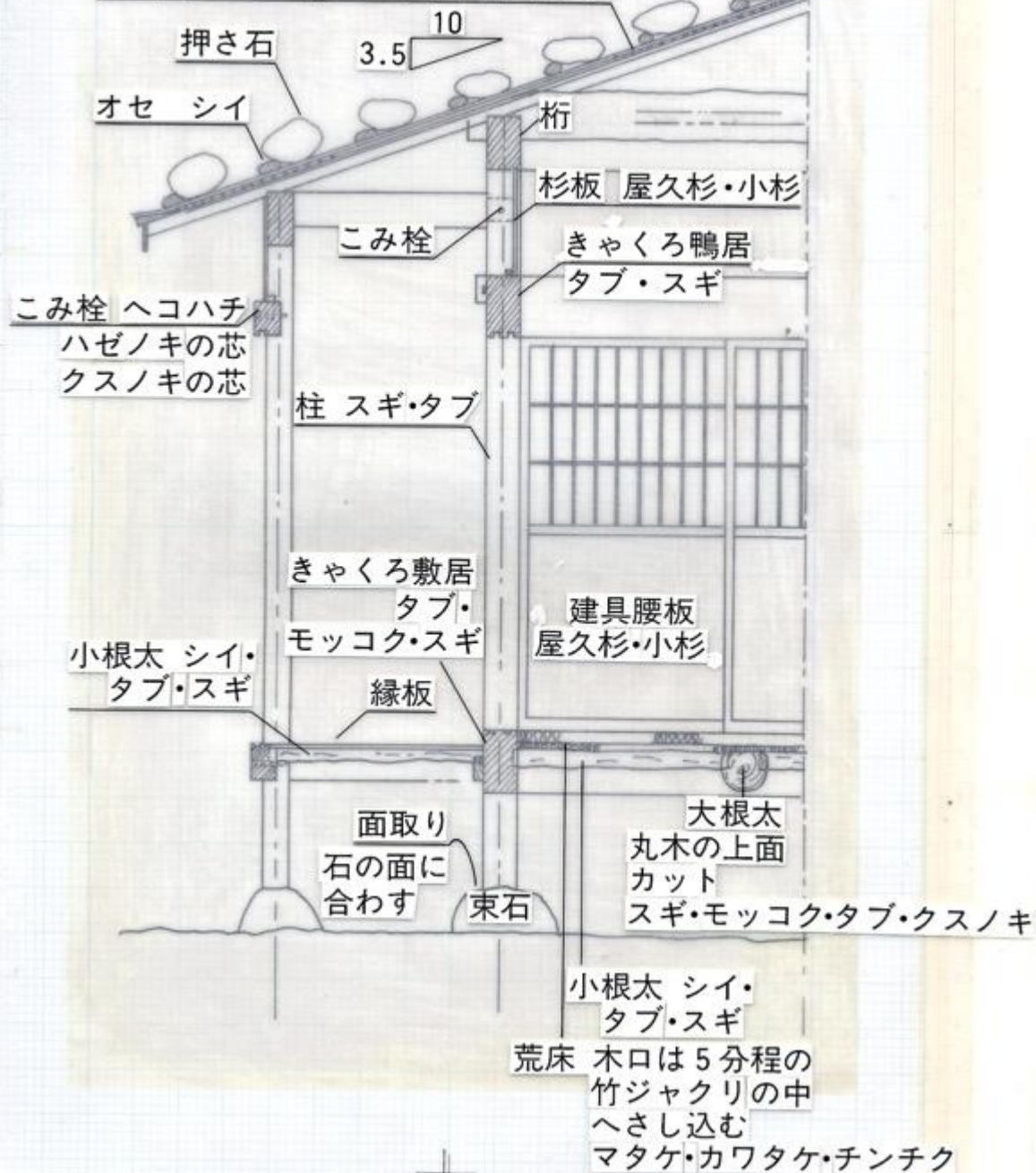
屋久島における利用植物の分布

用途・分布が複数ある場合は、主要と思われる方に分類

昭和30年代以降に利用が始まった観賞・換金用の野生植物は除く



野小舞 マタケ・チンチク・カワタケ



アラゲキクラゲ



シイタケ



照葉樹林帯の山菜・キノコ利用は低調

常緑樹は食害に対する防衛がある
根栽も有毒なものが多い

→簡単には山菜にならない

→水さらしや発酵などの加工が必須

キノコは種多様性が高く、お互い似ている

→食用／有毒の区別がつきにくい

→しかも、毒キノコはときに致死性的

屋久島～西表島 食用菌は4～5種

椎葉村ではキノコ食自体がタブーとなる集落も

雲南野生菌鍋



中国·楚雄
CHUXIONG CHINA

首届国际彝学高峰论坛

THE FIRST INTERNATIONAL SUMMIT FORUM OF YI CULTURE

主办：中共楚雄州委 楚雄州人民政府 中国社科院民族学与人类学研究所
承办：云南省社会科学院 中共楚雄州委宣传部 楚雄彝民族文化研究院
协办：云南省彝学会 贵州毕节学院 四川西昌学院 楚雄师范学院 中华彝族企业家协会

汤本贵和





老房子®

陽光山珍

大酒樓

山/珍/野/生/菌



◎干巴菌 158元/份
(青椒、干椒)

◎白油青头菌 58元/份



◎牛肝菌 68元/份
(青椒、干椒)



◎鸡枞菌 138元/份
(上汤烩、鸡汤)



◎青椒鸡油菌 58元/份



◎火腿烩松茸菌 168元/份

雲南野生菌鍋



「雲南十大美味野生菌」

- 1) 鶏枳 (*Termitomyces albuminosa*=オオシロアリタケ: シロアリが培養)
- 2) 竹蓐 (*Dictyophora indusiata*=キヌガサタケ: 竹林に発生)
- 3) 松茸 (*Tricholoma matsutake*=マツタケ: 京都菌類研究所の山中勝次氏によれば、雲南やブータンのマツタケはDNAで同一種だが、常緑のコナラ属、マテバシイ属、シイ属などと菌根共生)
- 4) 干巴菌 (*Thelephora ganbajun*=イボタケ属の一種; マツ林に発生)
- 5) 牛肝菌 (*Boletus* spp. =イグチ属の複数種; この仲間は大部分が食用。マツやカシの森林に発生する外生菌根菌で、ヨーロッパではポルチャーニやセップとって好まれる)

「雲南十大美味野生菌」

- 6) 青頭菌 (*Russula textilis*=ベニタケ属の一種; 樹林内に発生する外生菌根菌で薄緑色の傘が大きな特徴)
- 7) 虎掌菌 (*Sarcodon imbricatus*=シシタケ; 乾燥させると強い香りを放つ)
- 8) 羊肝菌 (*Morchella esculenta*=アミガサタケ; 日本ではあまり食用とされないが、フランスではモリージュといって有名食茸)
- 9) 猴頭菌 (*Hericium erinaceus*=ヤマブシタケ; 立枯木に生える白色腐朽菌)
- 10) 老人頭 (*Catathelasma ventricosum*=モミタケ属の一種; 針葉樹に外生菌根をつくる)





















照葉樹林帯の山菜・キノコ利用は低調

常緑樹は食害に対する防衛がある
根栽も有毒なものが多い

→簡単には山菜にならない

→水さらしや発酵などの加工が必須

キノコは種多様性が高く、お互い似ている

→食用／有毒の区別がつきにくい

→しかも、毒キノコはときに致死の

「雲南十大美味野生菌」

間違えにくい特徴的なキノコだけを食用に選択

照葉樹林帯の生物多様性

特定の樹種の優占度が低い

樹木の多様性が高い

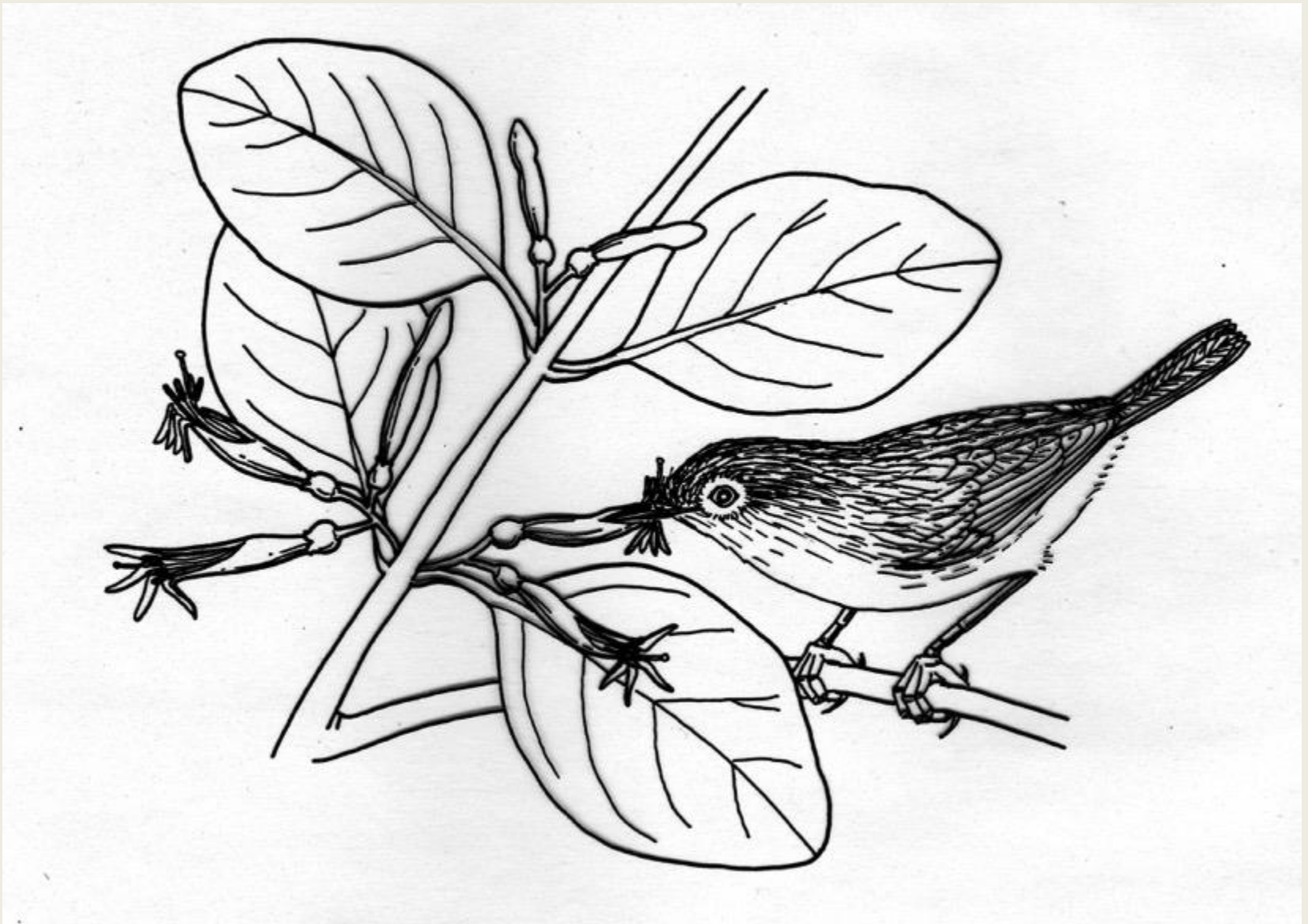
着生植物、寄生植物、腐生植物など多彩

植物の生活型が多様

動物媒花、動物散布種子が多い

生物間相互作用も多様





オオバヤドリギとメジロ

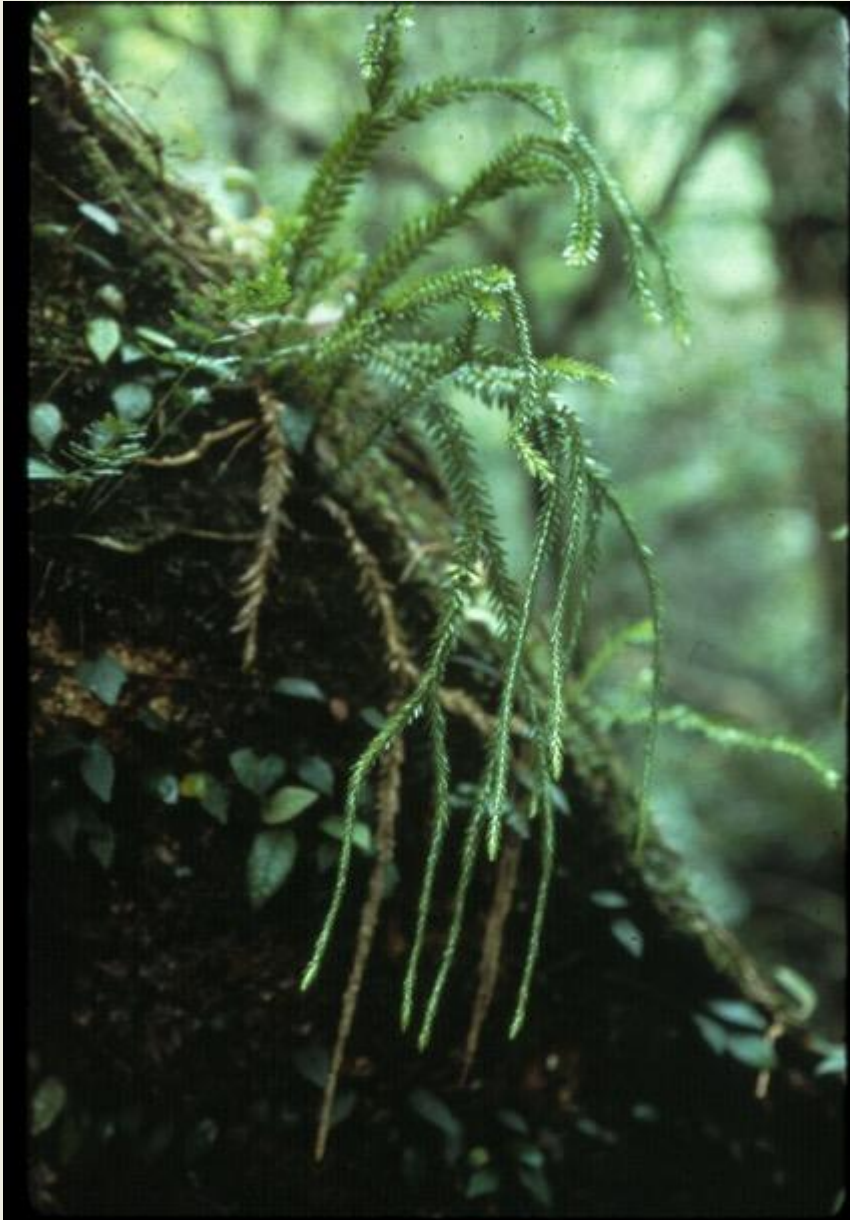
屋久島の着生ラン
フウラン(ラン科)



オオオサラン(ラン科)屋久島固有種



屋久島の着生シダ
ナンカクラン(ヒカゲノカズラ科)



シマオオタニワタリ(チャセンシダ科)



屋久島の寄生植物

ツリトリモチ(ツチトリモチ科)

キイレツチトリモチ(ツチトリモチ科)



屋久島の菌従属栄養植物(腐生植物)

シロシャクジョウ(ヒナノシャクジョウ科) ルリシャクジョウ(ヒナノシャクジョウ科)



屋久島の菌従属栄養植物(腐生植物)

ギンリョウソウ(ギンリョウソウ科)

タネガシマムヨウラン(ラン科)



屋久島に新種植物

写真家・山下さん発見



「ヤクノヒナホシ」と命名

屋久島で新種の植物が見つかった。照葉樹林の林床に生える腐生植物の一種で屋久島町宮之浦の写真家、山下大明さん(五)が発見。九州大学大学院理学研究院生態学研究室の矢原徹一教授が新種と断定、「ヤクノヒナホシ」と命名した。近く日本植物分類学会の学会誌に発表する。(32面に関連記事)

ヤクノヒナホシは花茎の長さ約一センチ、花は直径五ミリ前後。山下さんは昨年十月、標高約二〇〇―四〇〇メートルの森で冬虫夏草を探していた見つけたという。今回の再調査では、南部の標高約三五〇メートルの照葉樹林で約三十株が確認された。

ズーム

腐生植物

光合成をしないため、菌類

から養分をもらって生活する種子植物。広くは腐葉土、生物の死体など腐った物を栄養分にしている植物をいう。

新種「ヤクノヒナホシ」発見

腐生植物解明へ手がかり



ヤクノヒナホシを発見した山下大明さん

態がまったく違う」と目を見張った。腐生植物に詳しい東京大学理学系研究科理学部の塚谷裕一教授と検討した結果、「タヌキノシヨクダイ科ヒナノボンボリ属の新種として記載するのが妥当」と判断した。

ヒナノボンボリ属は、これまで愛媛のヒナノボンボリと沖縄のホシザキシヤクショウ、それにカメルーンで一種確認されているだけ。「まさか屋久島に新種が存在するとは思わなかった。腐生植物の世界はまだよく解明されていない。その進化の過程を探るのにまたと

ない発見」と矢原教授は語る。

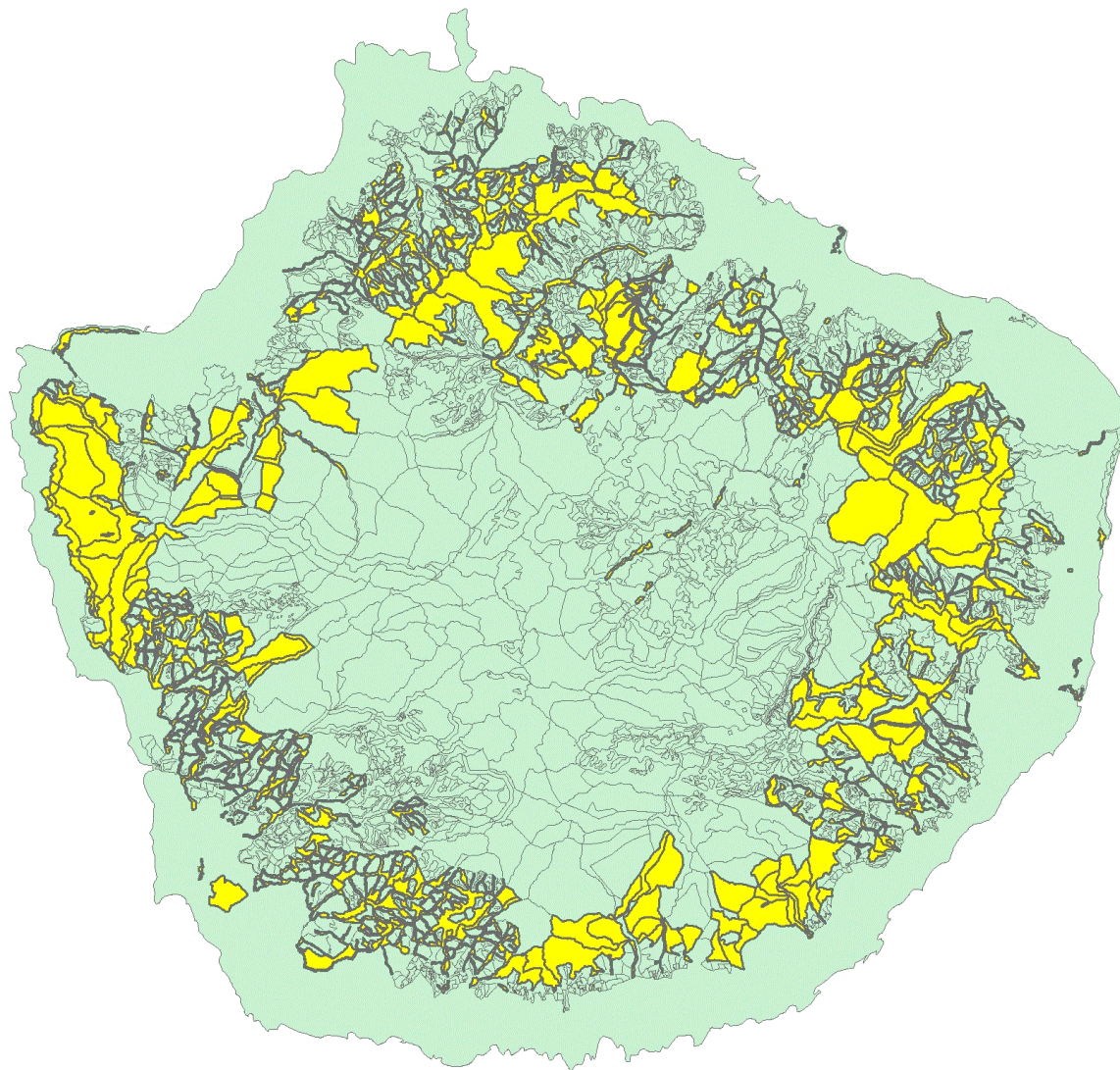
命名はヒナノボンボリの「ヒナ」とホシザキシヤクショウの「ホシ」に屋久島の「ヤク」を冠して「屋久の雛星」としたという。発見者の山下大明さんは「新種だと聞かされ驚いている。八年前に違場場所でも見たが、林道工事で破壊されてしまった。照葉樹の森は身近にありすぎて軽んじやすいが、奥深くて繊細な世界。まだまだ未知のものが隠されている。ヤクスギの原生林がある奥岳と同じように大切にしてい」と話した。

屋久島で発見された新種のヤクノヒナホシ。世界自然遺産の島は、生命のエネルギーに満ちた島の

であることをまた一つ証明した。(一面参照) 新種の植物と断定した九州大学大学院理学研究

院生態学研究室の矢原徹一教授は「沖縄のホシザキシヤクショウに似ているが、柱頭の付属体の形

屋久島の老齢照葉樹林



光合成しない新種続々

鹿児島県の屋久島やその周辺の島々で、新種の植物の発見が相次いでいる。いずれも光合成をせず、キノコなどから栄養を奪って生きる「菌従属栄養植物」という珍しい仲間だ。葉もなく、小さい花をひっそりと咲かせて自立した植物の姿を、森を漂り続ける地元の写真家と若手の植物生態学者のコンビが探し出している。

屋久島と周辺



西発見

写真家・研究者がタツグ

40年にわたって島の写真家を撮り続けていた鹿児島県屋久島町在住の写真家、山下大明さん(61)は昨秋、屋久島に自生する菌従属栄養植物「ヤクノヒナホシ」を見せると、植物生態学者が専門の末次健司・神戸大特命講師(29)と出会って暗い樹林を歩いた。大きながら、ほとこの青い玉の粒、菌従属栄養植物のイメージが湧いた。

40年にわたって島の写真家を撮り続けていた鹿児島県屋久島町在住の写真家、山下大明さん(61)は昨秋、屋久島に自生する菌従属栄養植物「ヤクノヒナホシ」を見せると、植物生態学者が専門の末次健司・神戸大特命講師(29)と出会って暗い樹林を歩いた。大きながら、ほとこの青い玉の粒、菌従属栄養植物のイメージが湧いた。



タブガワムヨウランが見つかった森



タブガワムヨウランを観察する末次健司さん(左)と山下大明さん＝屋久島町

宝庫の森伐採の危機

東京大の塚谷裕一教授(植物学)によれば、菌従属栄養植物は世界で6000種ほどが報告されており、調査が進んでいない。東アジアで主に新種が見つかっている。日本では明治時代から各地で珍しい植物調査が実施されたため、国内で新種が見つかることは極めてまれだ。しかし、屋久島でこれまで調査されてきた主な場所には、現在世界自然遺産地域になっている高山帯。末次さんらが新種を見つけて



新種と確認されたタブガワムヨウラン＝昨年7月、屋久島町、山下大明さん撮影

2人は今年にも、屋久島高山帯の森を歩いた。屋久島で多くの植物の発見を撮ってきた山下さんは「何十年も気付かなかったが、末次さんの協力で新種の発見が続き、屋久島の菌従属栄養植物の価値をあらためて実感している」と話す。菌従属栄養植物を見つけたのは屋久島。光合成をしない植物は、地上に姿を見せるのは花をつけることだ。その花も数センチと小さい。暗い森の中で、はうようとして地面を漂う。しかし、幼い頃から昆虫

高きところの葉の上に葉の裏の白い粒のような花を咲かせる。時ではばばばと見かける菌従属植物のホンコンソウだと山下さんは思っていたが、末次さんは花が2つと顔を近づけて言った。「これは違う種類かもしれない」。



●ヤクノヒナホシ(ヤクシマソウ)＝山下大明さん撮影

が好んで、虫が集まる花も観察し続けてきたという末次さんは、屋久島以外の島でも続々と新種を見つけている。



今年4月には屋久島の北西約100キロに浮かぶ黒島(鹿児島県三島村)で、花を咲かせない新種「クロシマヤツシロラン」を見つけた。茶褐色の花を咲かせるヤツシロランの花は小さく、ヤツシロランの葉を思わせるように持ち帰ったが、なかなか咲かないために調べてみると、すでに自家受精していた。花の形もこれまで報告例がないものだった。森が深く、花粉を運んでくれる虫が少ないため、花を咲かせることをめめた可能性が大きい。

黒島の森にあるヤツシロラン(同)でも、茶褐色の花をつける「タケシマヤツシロラン」や「ヤクノヒナホシ」を発見。この3年で6例の新種を発表した。末次さんは「新種の発見は、森を知り尽くした山下さんや島の方々の協力があってこそ」と話す。

うになるだけで生態系が変わり、光合成しない菌従属栄養植物が生息する環境は大きく壊れてしまう。末次さんは「森から栄養を奪う菌従属栄養植物が生かされる」といふことは、余分な栄養を奪われる豊かな森であるという証だ。貴重な低地の菌従属植物を守り、保護する必要がある」と訴えている。(屋久島通信員・武田明)

◆「ひまのひまの」は休みました。

国際照葉樹林サミット参加申込書

下記の申込書に必要事項をご記入の上、FAX・電子メールで事務局までお申し込みください。

申し込み締め切り日：平成22年5月10日（月）夕方5時必着

氏名	ふりがな
所属団体	
住所	(〒 -)
電話番号	
FAX番号	
電子メール	
参加される日	☐ 研究フォーラム ☐ 5月21日（金） ☐ 国際照葉樹林サミット ☐ 5月22日（土） ☐ 現地見学会 ☐ 5月23日（日）
22日（土）参加を希望される分科会	☐ 第1分科会 ☐ 第2分科会 ☐ 第3分科会 ☐ 第4分科会 参加を希望する分科会の口に、第1希望は数字の1をご記入ください。第3希望までご記入ください。定員を超える場合は先着順となります。
23日（日）参加を希望される現地見学会	☐ Aコース ☐ Bコース ☐ Cコース ☐ Dコース ☐ Eコース ☐ Fコース 参加を希望する見学会の口に、第1希望は数字の1をご記入ください。第3希望までご記入ください。定員を超える場合は先着順となります。
お弁当の注文	☐ 22日注文 ☐ 23日注文 注文される日付の口にチェックマークをご記入ください。
交流会参加	☐ 参加する ☐ 参加しない どちらかの口にチェックマークをご記入ください。

※ この申込書で得た個人情報は本事業の目的以外では利用いたしません。

宿泊先情報

施設名	電話番号	大人1泊2日基本料金
綾川荘	0985-77-0070	本館7,875円 西館6,825円
綾町サイクリングターミナル	0985-77-1227	6,300円～
ふれあい宿センター	0985-77-1511	5,250円～
民宿山水	0985-77-1626	7,350円～
ペンションきねずみ	0985-77-3346	9,450円～
綾の食卓	0985-30-7115	13,750円～
酒泉の杜	0985-77-2222	22,250円～
風人の宿	0985-77-3740	3,900円～（朝食のみ）
綾・美穂宿舎とオス・ヴィレッジ2nd	0985-77-0048	7,000円～（朝食のみ）

綾町にご宿泊を希望される参加者の方は、ご自身でご予約ください。上記の表は参考資料です。詳細については、直接宿泊施設の方までお問い合わせください。

会場案内図



お申し込み先：国際照葉樹林サミット実行委員会 事務局(てるはの森の会)

〒880-0014 宮崎県鶴島2丁目9-6 みやざきNPOハウス403号

TEL(0985)35-7288 FAX(0985)35-7289 電子メール teruha@miyazaki-catv.ne.jp

表紙写真：綾の照葉樹林（撮影＝坂元守雄）

国際照葉樹林サミット

2010.05.22(土)～23(日)

5月22日は国連の定める「国際生物多様性の日」です

会場：綾町公民館文化ホール

International TERUHA Forest Conference

中国・ブータン・屋久島・大隅・対馬・綾

主催：「国際照葉樹林サミット」実行委員会

(九州森林管理局、綾町、日本自然保護協会、てるはの森の会、総合地球環境学研究所、NPF法人 ひむか維新の会、宮崎県木材育壮年会連合会)

申込み＆お問い合わせ先：てるはの森の会 TEL 0985-35-7288 FAX 0985-35-7289 電子メール teruha@miyazaki-catv.ne.jp

2010年は国連において「国際生物多様性年」と定められ、名古屋で生物多様性条約締結国会議(COP10)が開催されます。国連の定める「国際生物多様性の日(5月22日)」に、東アジアに広がる照葉樹林の生物多様性やそれが育んできた文化、森林の保全と利用への取り組みに関する情報の交換や交流を通じ、その重要性を再認識すると共に、照葉樹林を次世代により良い形で引き継ぐ事を目的として「国際照葉樹林サミット」を開催いたします。

5/22
(土)

<午前> 受付(9:30～10:00)参加費500円(資料代)

① 開会(10:00～10:10)

開会挨拶：綾町町長(「国際照葉樹林サミット」実行委員長)
九州森林管理局長

② 基調講演(国内外の照葉樹林の現状と歴史についての講演)(10:10～12:30)

(1) 大澤 雅彦 氏(マラヤ大学教授)

(2) 国外研究者 中国・雲南省、ブータンから事例発表を実施

<午後>

③ 分科会でのテーマ別討議(13:15～15:15)

- 照葉樹林の生物多様性と文化
- 照葉樹林の多面的な機能と保全・利用
- 照葉樹林を軸にした地域づくりと市民参加
- 体験分科会(親子で作る木工教室)

④ ポスターセッション(15:15～16:15)

⑤ 全体討議(16:15～17:25) テーマ別討議の取りまとめと大会宣言に向けた議論

⑥ 大会宣言の採択(17:25～17:30)

閉会

閉会挨拶 上野登てるはの森の会代表(「国際照葉樹林サミット」副実行委員長)

5/23
(日)

<交流会> (閉会式終了後、参加者の親睦を深める目的で交流会を開催します。参加費3,000円予定)

現地見学会(9:00～14:00)参加費1,000円(バス代・保険料込)

森林生態系保護地域やボランティアによる復元作業箇所等の現地見学。森林だけでなく「ほんものセンター」や有機農業等の地域産業を見学するコースも予定しています。

2014年国際照葉樹林サミットin屋久島

めぐみの森を未来につなごう

2nd International TERUHA Forest Conference in Yakushima

第2回国際照葉樹林サミットin屋久島

2014年6/6(金)~8(日)

6/6(金)照葉樹林文化講演会



6/7国際照葉樹林サミット

5/25イベント ヤクタネゴヨウの
巨木の森を訪ねる



体験



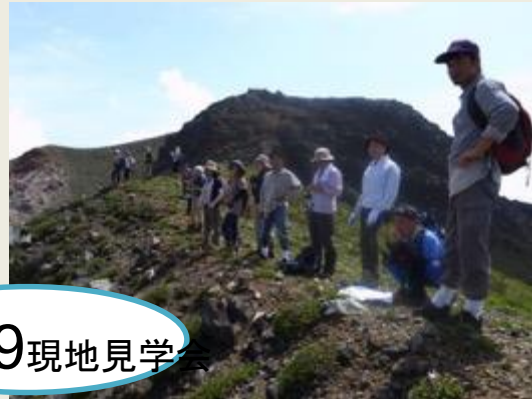
展示



ポスター



西部地域



口永良部島



一湊



宮之浦

6/8-9現地見学会



「屋久島学ソサエティ」へようこそ

屋久島を愛し 住民と研究者が共に学びあう 新しい集まりを設立します

屋久島学
ソサエティ
設立大会

2013年12月14日(土)・15日(日) 屋久島町総合センター(宮之浦)

14日(土)
18:30~

基調講演
総合センターホール

15日(日)
18:30~



下野 敏見
鹿児島県立大学 顧問



山極 寿一
京都大学大学院 教授

「屋久島の歴史と文化の魅力」

はるか歴史の古層から
明らかにされる屋久島の世界
各集落の食、行事、芸能、
伝説などを紹介

「学びの場としての屋久島」

サルとヒトと歩いた40年

14・15日 10:00~20:30

鹿児島大学総合研究博物館 共催
「屋久島の自然」展

◎屋久島の自然と様々な生物相を紹介する
解説パネルと標本を展示します

◎標本は、食肉類、鳥類、哺乳類など多数
屋久島の多種多様な生物相を知る絶好の機会です

■ポスターセッション

◎調査・研究・学習内容を
ポスターにて展示・発表します

15日(日) 19:20~

■テーマセッション

「屋久島学ソサエティが目指す」

—伝えた、聞いた、思った—

荒木 雅治 小原 比呂志 手塚

中川 正二郎 日下 雅紀 三 共

山極 寿一

◎コーディネーター: 湯本 貴典

(京都大学 産学連携研究所)

15日(日) 14:00~ 設立

研究者と住民交流



協働で地域発展目指す

「屋久島学ソサエティ」発足

14・15日に「ソサエティ」設立大会

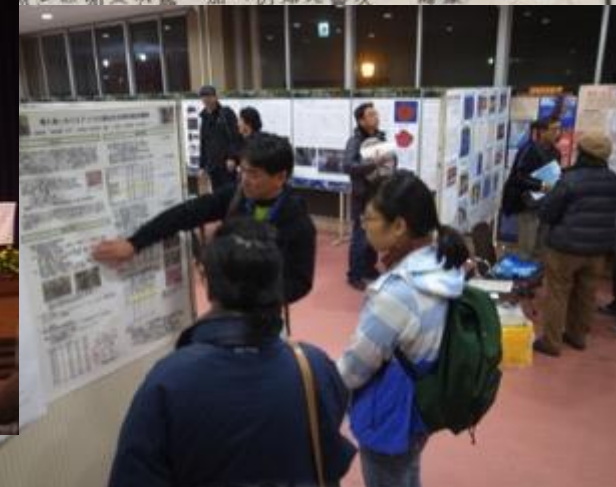
分野の研究者と住民交流

屋久島が世界自然遺産に登録されて11日で20年。島を調査研究の対象
様々な分野の大学研究者と島の住民らが、交流の場となる学会「屋久島
エティ」を設立させる。設立大会が14・15の両日、屋久島町である。

事務局を担う屋久
島地産物振興会の事務局
「地域を全体的に捉え
み、研究者と住民の知
し、屋久島の今と未来の
立てよう」という思いで、
関わらず多くの人に参加
し、話し合っている。

発起人の一人、屋久島
地産物振興会会長兼学長
の矢野徹一教授は、
式典で「屋久島の積み
重ねた歴史を、
「世界に向けて、
研究者がかわつてい
る」と話している。

「屋久島学会」発足



屋久島学
ソサエティ
設立大会



2016年 第4回 屋久島学ソサエティ「屋久島低地照葉樹林の多様性とその保全」

